

---

# 光の先導者

パイン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

光の先導者

### 【Nコード】

N9036X

### 【作者名】

パイン

### 【あらすじ】

地区大会で負けてしまった先導アイチは、チームQ4だけでなく周りの人からの心のない悪意に精神はすり減り自殺を考えるまでに追い詰められたアイチを誰の手にも届かない場所に送った聖竜。自分たちのせいで居なくなったアイチにひたすら誤りながら許しをこう仲間たち…。

そんな彼らに聖竜は元凶でもある二人にチャンスを与えた。

二人は無事先導アイチを連れ戻すことは出来るだろうか！

## 序章

今日も負けた：最近負けてばっかだしチームの皆に迷惑をかけてる自分が、情けない。

けど、皆は気にするなと言ってくれたけど雀ヶ森レンさんの言葉に僕は、目の前が暗くなった。

折角地区大会に行けたのに自分のせいで全国大会に行けなかっただけでなく權くんが、一勝してくれたチャンスを潰してしまった……僕が、弱いせいで。

何時もは寄るカードキャプタルに行かず歩道を渡る人々をぼんやりと見てふと、「死にたい」と思った時は既に体が動いていた。

けたましく車のクラッシュを鳴らす音が、近づき僕の体は宙に浮いたと思ったら意識を白い光に飲まれていった。

## 第一章 罪（前書き）

最近ハマってしまったアニメの話を書きたくて連載してしまいました！

無謀な挑戦をするのは勝手だが、連載中の小説書けよなと思う人はいるでしょうが、勿論です。

2つ両立するのは思っていたより大変です。 自業自得）

ちなみにカードファイター・と言う「カード」が付くアニメなのにそんな要素は残念ながらありません。 なに！？）

ですが、頑張つて数人は出します！せめてロイパ口は出したいと思つてます。

この度はへボ作者の書いた小説を観覧して下さった方々に感謝します。

皆さんが、また見ていただける小説を頑張つて書きますので見捨てないで暖かい目で見守ってください！

## 第一章 罪

權視点

あの大会からアイチの様子が、変だ。

おどおどしてるのはいつものことだが、最近暗い顔で俯きがちだ。そのせいか知らないが、カードファイトしても必ず負けてその度に落ち込む姿にアイチの仲間だけでなく三和も心配していた。

表情を変えない俺に葛木だけでなく馬鹿二人が突っかかる。勿論俺も心配してうるが、単に顔に出ないだけだ。

それはともなく俺は偶然にもアイチを見つけた。

しかし様子が、変だ。いつも俺の姿を見れば駆け寄るのにただただ歩道を眺めていた。

いつもなら無視をするが何となく声をかけてみた。

「おい、アイ…」

最後まで言えなかった。アイチの体は車が行き交う歩道に身を投げだしていたからだ。

俺は咄嗟にアイチの腕を掴むと辺りを眩しい光が、目を焼いた。

光輝く白い翼に青と白の体をした女性的な…美しいドラゴンを見たことが、合った。

良くアイチの切り札として召喚されているロイヤル・パロディンたちの神。

「お前は…」

權が、その名を言う前にアイチを抱えたまま消えてしまった。

今までアイチの腕を掴んでいた手は、虚しく空に伸ばされたままだった。

### 雀ヶ森視点

地区大会でやっと見つけた櫂の隣にいた青髪に蒼眼の少年？が、気になって仕方なかった。

それに最近カード達が騒がしいのも気になるが、別に僕に取っては関係ないと切り捨てすぐ櫂をどうしようかで頭が、一杯だった。気紛れにいつもと違う道を歩きたくなった。

別に理由なんて無い、そう、ただ何となくカードの声が、したからだ。

案の定カードの声を頼りに道を抜けるとさっきまで自分の頭を悩ませていた少年…そう、名前は確か……………。

「先導…アイチ」

名前を言ってみて僕は、眉間に皺が寄るのを感じた“似合わない”。それが雀ヶ森レンが出した結論だ。

先程からアイチはびこうだにせず自分より虚ろいな瞳で行き交う車を眺めていた。

レン自身別に少年に興味がないしどうなるうが関係ないが、その

反対に權を見て表情を緩めた。

「（ふふ、また合ったね。やっぱり君は僕から逃げられないんだよ）」

僕が、笑い權に近づくため足を踏み出したと同時に酷い頭痛が、レ  
ンに襲った。

「……っ！」

痛みあまり思わず方膝を付くと脳内に光輝く美しい翼を持つドラ  
ゴンが、気を失っているアイチに抱えこちらを睨み付けてた。

「君だね。さつきから僕を呼んでいたのは…ソウルセイバー・ドラ  
ゴン」

（我は汝を呼んだ覚えはないぞ？呪詛位は言ったが…）

「……………」

（そんな話しは良い。貴様は我らが、マイヴァンガートを傷つけた  
…その罪を償うために呼んだ）

「罪？何の話しだい??」

僕が、心底分らないと首を傾げるとソウルセイバー・ドラゴンは  
忌々しげに睨んだままだった。

（貴様のパートナーとは話しをつけてある）

「パートナー？」

僕が、不思議そうな顔で目の前のドラゴンを見ると空いている手を素早く僕の頭を撫でると何事も無かったかのように見下ろしていた。

「貴様の力…罰として封じた。二度と使えないだろう」

「なあ！！！」

驚く僕をよそにドラゴンは、僕を冷めた目で見下ろすと一言告げて去ってしまった。

気がつくと僕は、道路側に立っていた。夢かと思っていたが、目の前の光輝く羽に夢でないと告げていた。

（力を返してほしければ連獄の竜の主と貴様の暗黒竜をつれ???公園に来い）

## 1話 滅竜魔導師と先導者（前書き）

一度に二本投稿だと!?

今までの作者にはあり得ない奇跡です……!

（内容がへボいんじや意味ねえよ。by通りすがりの火竜）

地区大会だと書きましたが、まだアイきゅんが、目覚める前の話しだと思ってください。

それとさだ…レン様を登場させましたが、まるつきり別人です。

ある理由からアイきゅんと權が、大切な存在になります。憎悪 曲  
がった愛と言う感じです。

次からは精神的に弱り心を無くしかけたアイきゅんが、出て来ます。

・追加

二人が、アイきゅんの心を取り戻してもまだ終わりません!

聖竜が、二人を送った理由は主の心を取り戻す事。終焉のドラゴを  
呼び寄せるあるギルドを倒すため。

詳しい内容は話しが、進むにしれ分かってくると思います。

（無茶苦茶な設定だな。流石名前の通りだ。by厨二病）

## 1話 滅竜魔導師と先導者

魔法が、当たり前前に存在する世界、フェオーロ王国。そこにマグノリアと言う町があり各自に依頼を受けこなす魔導師ギルドがあった。問題はかり起こす魔導師ギルド、フェアリーテイルに所属している桃色の髪少年がいた。

「マカオそれは本当か!？」

「おう、間違いねえぜ」

「やっと…やっと、これでイグニールに会える！」

嬉しそうに笑う少年に翼をはやした青い猫も嬉しそうに笑った。

「あい!良かったね、ナツ」

「おう!」

「騒がしはよハッピー!」

「ナツさんどうしたんですか？」

自分たちの隣で騒ぐナツたちにシャルルは呆れるが、ウインディーは気になり理由を聞いた。

「何でもマカオが、三体のドラゴンをこの街から向こうにある森で見たんだって!」

「ドラゴンを三体も!!」

「早速だけ行って見ようぜ!」

「うん!」

頷くウィンディーにナツはニカッと笑い二匹の猫も連れいざ向かわんとしたときにガジルが、止めた。

「おい待てナツ。またガセじゃねえのか?そんな曖昧な理由で行くなんざ時間の無駄だな」

「何だとガジル!お前もメタルカーナに会いたくないのかよ!??」

「……………」

「ちい、勝手にしろ。行こうぜウィンディーにハッピーにシャルル」

「ああ、待つてくださいナツさん!カジルさんもごめんなさい」

「ちょっと待ちなさいよ!あんたウィンディーの体力も考えて走りなさい!」

「シャルル、ナツ何かほつといておいらとデート……」

「うっさいはよハッピー!これ以上ふざけたこと言つと雄猫と言つわよ!」

「ええ〜!酷いよシャルル〜!??」

そんな騒がしい二人と二匹が、消えたのを見てため息をついた。  
そんなガジルにミラーが、いつものものにこやかな笑顔で近づいて来た。

「大丈夫よ。何だってナツがいるんですもの」

「それが、心配なんだよ！」

再びため息をつくカジルにミラーは笑顔を崩すことは無かった。

ギルドから離れた森にナツたちはいた。

「(くんくん) …こっちだ！」

「本当でしょうね？無駄にウィンディーを歩かせただけならただじやおかないはよ」

「シャルル怖い」

「お、落ち着いてシャルル。(汗) ナツさんの言つとつり確かにドラゴンの匂いはします。ですが…」

言葉を途中で遮ったウィンディーを不思議そうに見たシャルルとハッピーだったが、ナツの言葉に二匹は視線を向けた。

「…匂いは確かにドラゴンだけどちらかと言えば人間に近い匂いがする…しかも人間の匂いもするんだ」

「あんた人間じゃないの？」

シャルルの言葉にナツだけでなくウィンディーも辛い様な…だけでも誇らしげな表情をしていた。

「私たちは幼い頃にドラゴンに育てられたって言ったでしょ？だから魔法も身体能力も寿命も魔導師の…：…ううん、人間の軸からはみ出しているのよ」

「ちなみに寿命の方はドラゴンの血を飲むことによって長寿になるし年もあまり取らないしな」

ウィンディーとナツの言葉に衝撃を受けた二匹は無言になりナツたちもあまり触れたくない内容なため暫く無言な空間が、出来ていた。

「ここだ」

ナツたちが、森を抜けると1ヶ月前には無かった大きな洞窟があった。

「うおおい！イグニール！！」

「ナツさん、まだイグニールさんが居ると決まったわけじゃ…」

ナツを止めるウィンディーに洞窟から腰まである血の様に赤い髪に赤い瞳をした美しい青年とこれまた横に跳ねたミルクティー色の髪に孔雀石の瞳をした美しい青年が、無表情ながらも不機嫌な顔で楽しそうに話す赤い髪の青年と出て来た。

「權、いい加減僕の元に帰らないかい？」

「くだい。貴様といる位ならアイチと一緒に死ぬ」

「なら、僕は權とアイチを殺して一生愛でるよ」

「死ぬ。魔物に喰われて死ぬ」

「君たちが食べるんなら僕、死んでも良いよ？」

「……………」

何とも言えない会話をしている二人にウィンディーたちはうろたえているが、ナツだけは近寄りがたいオーラを放つ二人の元に向かっていた。

「なあなあ！お前らイグニール見なかったか！？」

「ナツさん！！」

「待ってナツ！」

「ちょっとウィンディー！そいつらはどうなったって良いけど赤い髪の男には近づいちゃ駄目よ！！」

いきなりのナツの登場に驚く二人を他所にウィンディーたちは急いで近づくの気づいたさつきまで楽しそいに話していた赤い髪の青年はきよんとした瞳でナツを見た。

「…僕はイグニールではありません」

「ちげえよ！イグニールはドラゴンだ！！」

「ドラゴンだと？では、貴様が火竜サラマンダーのナツか？」

「そうだけどそれがどうし…」

しかしナツが、最後まで言い終わる前に顔すれすれに横切った黒い炎に気づき慌てて後ろに下がった。

「うわぁ！？」

「きゃぁ！大丈夫ですかナツさん！！」

「てめえいきなり何しやがる！！」

いきどわるナツに駆けつけたウィンディーたちも黒い炎の元を辿るときまで自分たちを見ていなかったレンの両手に黒い炎を纏っていた。

「君たちには興味ありませんけど僕たちのために死んでください」

「そう言う事だ。レン、サポートしろ」

「はい」

レンが、飛翔するとカイは腰に刺してあった剣を抜くと赤黒い炎を纏わせナツに切りかかった。

## 2話 心（前書き）

か、書けた！

今まで青エクとカテリボしか書いてないので初めてヴァンガードの話を書きますので慣れなくてどうしても最新が、遅くなりがちですみません。

次からいよいよアイチたちはギルドに向かいます！

予告した様にカードを使った戦いはありません。

なぜなら作者が、あまりルールを知らず勢いで書いた話だからです。

時々都合で最新できなくなる時もありますが、よろしくお願います！

## 2話 心

洞窟の中に一人の少年が、犬の姿をした毛並みのピンク色と全身ピンクの犬が、心配性に見ていた。

「あいち…」

「あいち…だいじゅうぶ？」

「ういんがる、ふるうがる…僕、疲れちゃた」

力なく微笑むアイチに二匹はアイチの体にそれぞれ体を擦り寄せた。

「そう言えば何か外が、騒々しいんだけど…」

アイチは立ち上がったが、二匹のハイビーストはそれを止めた。

「あいちまだうごいちゃだめよ！どうせわたしたちをつかまえようとしたみつりようしやでしょー！」

「そうだよ！もしあいちをうごかしたことが、ばれたらはらぐろけんじやにころさるんだよ！！（ぼくが…）」

「ほら、ういんがるもいつてるんだからおとなしくしないとだめよ」  
「！」

「わあああ！わ、分かったよ」

「ぶん、わかればいいのよ」

「ほんとぶろつがるはくちつるさいだろ？ だならばあといわれるんだ」

「なんですって！ だれがおばさんよ！？ そのけをむしってやる！」

「きゃい~~~~！！」

「まてじらあ！」

ぶろつがるに頭を噛まれ悲鳴をあげながら逃げるついでにがるを追いかける姿を微笑ましく見ていたアイチだったが、もうスピードで壁に叩き付けられた人物に目を見開いた。

「か、權くん！！」

壁に叩き付けられた人物が、權だと知り慌てて駆け寄ろうとしたアイチを二体のハイビーストが、道を塞ぎさらにいつの間にか沈黙の騎士ギアラティンが、アイチを羽交い締めにしていた。

「離してギヤティン！ 早く權くんの治療をしないと」

「……………」

「おちついてあいち。あなたのをかりなくともえれいんが、いるでしょ？」

ギアラティンの拘束を解こうと足掻くアイチにぶろつがるは諭した。

「そ、そうか！ 世界樹の巫女エレインをコール！」

アイチが、言うと足下まである長い草色の髪を二つに分けた女性は、  
權の方に近づくと両手を組体から緑の光を出し權の体を包んだ。

ほっとしたと同時にギラティンが、消えたことにアイチはぎょっと  
した。

「ギヤラティン!？」

「落ち着いてくださいアイチ様。彼は、ライドした分けではありません  
せん。ですので顕現出来る時間も短かったのです」

「それじゃギヤラティンは!」

「鍵の中で眠ってます」

「よ、良かった」

安堵したアイチは權の容態を見てふらつきながらも立ち上がる姿に  
心配そうな顔を見た。

「權くん怪我は大丈夫? 痛くない?」

「こんなのかすり傷にもならん」

「權くんが、無事なら良かったけど…」

「アイチ?」

暗い表情のアイチに權は暫く眺めていた。沈黙が、辺りに広がるが、

アイチは思い口をようやく開いた。

「僕のことは大丈夫だよ、權くん。だから関係ないナツさんを僕の事情で巻き込んでしまった事への謝罪が、したいんだ」

「……………しかしお前の場合は同じ滅竜魔同士の魔力を貰うことによつて体を安定させる。全て手に入れて残っているのは火竜だけだ」

「そうだとしても僕はもう…誰かが…誰かが傷つくのを見たくないんだ！」

アイチは權とにらみ合い權の無機質な孔雀石に視線を反らさずにらみ合ったが、先に折れた權は、深くため息をついた。

一度決めたら決して曲げない意識の強さを知っている權だからこそアイチに“希望”を託したのだ。

白の英雄。ブラスター・ブレードノの様になれと。

「おい、かげろうのごぞう！いまのあいちをつれていかせるつもりなの！そんなことゆるさないぞ！！」

「くやしいけどういんがるのいうとつりだは」

「お前たち、アイチの意識を尊重しろ。勝手な屁理屈を押し付けるな」

「なんだと！たかがにんげんのぶんざいでえらそうに。おまえらのせいでぼくらのせんどうしやをつしなうところだったんだぞ！」

「……………」

「ういんがる。きもちはわかるけど、あなたすこしいすぎだは」  
もめ始めたハイビーストの二匹におろおろするアイチは助けを求め  
権をみるが、洞窟の壁に背中を預け自分には関係ないと言うオーラ  
を放ちさらに戦い初める二匹に仕方なくアイチが、止めに入る前に  
腰に下げてた沢山の鍵の内薄い青色の鍵から小さな賢者マロンが出  
て着た。

「あれ？どうしたのマロン？」

「アイチ様、ここは僕に任せてエレインを戻してください。いつま  
でも彼女を出しておくのも失礼ですよ？」

「あわわわわ！ご、御免ねエレイン…！」

申し訳なさそうに謝るアイチに“巫女”と言う名にふさわしい微笑  
を自分たちの最愛の先導者に送った。

「いいえ、アイチ様が、謝る必要はありません。私もあなたたを観  
察をして収穫が、ありましたから」

「え??？」

アイチはクスクス笑うエレインに訳が分からないと言った顔で見る  
中ただ一人権だけはエレインの言葉の意味を理解し睨むが、彼女は  
権にもニコリと笑うと消えてしまった。

「ねえ、マロン。さっきのエレインの視線何か変じゃなかった？」

「そうですね？さあここは僕が、何とかしますのでいきなさい」

「…行くぞアイチ」

「う、うん。じゃマロン後はお願いね！」

「イエス。マイヴァンガード」

二人が、洞窟から出たのを確認するとマロンはアイチに向けていた笑顔とは異なる笑みを称え未だに喧嘩している二匹の元に向かった。

「さて、二匹には軽〜いお仕置きをしましょうか」

嬉しそうに向かうマロンの脇に抱える本を見ると“魔導書”ではなくなぜか“拷問の全て！（初心者向け）著者アカネ”と書かれた本を抱えていた。

權とアイチが、外に出てみると平然としているレンとボロボロのナツの姿に悲鳴を上げる声に気づいた二人は一時戦いを中止しレンは黙ってナツの方に向かうアイチと權を見ていた。

「すみませんすみません！僕の連れが、とんだ迷惑をかけました」

ナツたちは戦い中に自分に謝るアイチに呆けていたが、プルプル震えながらうつすら涙で潤った瞳はナツは保護欲。ウインディーは母性本能を刺激する可愛いさだったからだ。

「いや、俺の方こそい攻撃してわりいな」

「所で貴方たちは誰ですか？」

「えとえと……」

「……俺はカイ。こいつはアイチで赤い奴はレンだ」

戸惑うアイチの代わりに答えた權に尊敬の眼差しを送るが、權本人はいつもの様に見向きしない態度に落ち込む姿は見てる方が、痛々しかった。

「カイ、いつまでもそんな態度でいるとアイチくん嫌われますよ」

「何だレン、まだ生きてたのか」

「フフフ……僕は強いんだよ。それは君も知っているだろ？」

「……………」

權はレンを軽く睨むとアイチの腕を掴みナツたちに来る様に促すとさっさと導洞窟に戻ってしまった。

レンは權の態度に慣れてるため軽く肩をすくめるとさっきまでのイキキとした顔ではなく何の感情が、感じられない無機質な表情でナツたちに謝罪をして彼らを伴い洞窟の方に足を向けた。

### 3話 誤解（前書き）

原稿が、遅くなつてすみませえん！

前にギルドに行くと言いましたが、都合上次回に回しました。

楽しみにしていた方たちには、大変申し訳ありません。

最近寒くなりましたね。

皆さんも風には、気をつけてください！

また、ネタ切れで行き詰まることもあつて最新が、遅れがちですが、よろしいお願いします。

### 3話 誤解

アイチたちが、洞窟に着いた時に見た光景に固まってしまった。  
二匹のハイビーストたちが、震えながらマロンからできるだけ距離を取っていたからだ。

「……………」

「えーと、どうなってるのかな？」

「あいちー!!！」

「うわあ〜こわかったよ!!！」

「ちよっ！二人ともどうしたの？」

アイチに泣きながら抱きつく二匹を撫でながら座って魔導書と呼んでいたマロンは見ていた本を閉じにこりと笑いながらこちらに向かって来る姿に二匹は震えながらアイチに身を寄せた。

「先ほどはういんがるたちが、迷惑をかけてしまいすみませんでした」

「ううん、僕は気にしてないから大丈夫だよマロン」

「それは良かった」

アイチはにこやかに笑うアイチに笑いながら三個の鍵を出した。

「おお！お前もルイージと同じで精霊を使うのか？」

「ナツ、ルイージーじゃなくてルシイだよ」

「あ、二人とも名前間違ってますよ？ルリーさんですよ？」

「全く、頭が悪い雄どもね。それとウインディ、あんたも牛乳の名前間違ってるはよ」

ここにはいない仲間の名前を間違ってる三人にシャルルーは、ため息をつくなかアイチは、鍵の力で三人を戻すと今にお互い間違っている名前を言う三人に向きなあった。

「あ、話してもよろしいでしょうか？」

「ええ、いいはよ」

「実は、僕たちの守護竜が、昨日から帰ってこないんです、何か情報はありませんか？」

「守護竜？」

怪訝な表情をするシャルルーにアイチはチラチラと權を見てその目には「お前が、話せ」と書かれていた。

「……はい、僕の竜。センドウ・アイチはそ…セイバーでカイ・トシキくんはオーバードでススケモリ・レンさんはシャドウです」

「色は白、赤黒、黒色の竜です」

「やっぱりドラゴンが、いたんじゃないか！」

アイチの次に言ったレンの台詞にナツは驚愕の表情で二人に詰め寄る様に權は目を細めアイチは少し後ろに下がりレンは不愉快そうにしていた。

「それよりあの犬擬きは何なの？あの少年もここら辺で見ない顔ね」シャルルの言葉に今だに洞窟に居る学者風の服を着た少年は、そんなシャルルににこりと笑いかけた。

「初めましてエドラスのイクシードさん。僕はここで言う星靈にあたる存在です」

「星靈？それじゃアイチは滅竜魔導師でもなくて星靈魔導師？」

ウィンディーの言葉にマロンは苦笑いを浮かべながらういんがるたちと一緒にアイチの腰に下げていた鍵の中に消えてしまった。

「とりあえずお前らのギルドに案内しろ。その前に貴様の火を少しだけで貰うぞ、アイチに分けないといけないからな」

「それはどういうことですか？」

ウィンディーの疑問に今度はレンが、話した。

「アイチの魔法は俺たちと違って全ての魔法を無効にする光のドラゴンから教わった者です。ですから体は、そのために必要な要素が必要になってくる。ほとんどの要素は手に入れました、後は、火だけなんです……」

レンの言葉にナツとウィンディーは、酷く驚いた顔をするもナツはにかりと俯いているアイチに笑いかけた。

「何だよ、そう言うことなら早く言えよ！火ぐらい別に構わないぜ」

ナツの言葉にアイチは驚き遠慮しようとしたが、レンの笑顔という名の圧力に耐えきれずナツの申しでに承諾した。

「…お、お願いします」

「別に構わないっていったけどどうやってアイチに移すんだ？」

「簡単なことだ。ただ、アイチと手を握れば自動的に魔法は発動される」

「だったら何で私たちを襲ったのですか？」

ウィンディーの最もな疑問に權は言った。

「最近俺たちを捕まえようとする奴らが多くなったからな、お前たちもそいつらの仲間だと思ったんだ」

「何だよその理由は！？」

ナツが、勢どつる気持ちも分かる。

何せ正規ギルドにしてフェアリーテイルの一員だ。  
權の発言は家族同然のギルドを馬鹿にした発言だからだ。

「落ち着きなさい、ナツにカイ。まず、アイチに魔法を移してから

あなた方のギルドに仮入部させてもらいます。よろしいですか、ウインディーさん？」

「はい、私のことはさんで呼ばなくてもいいですよ」

「それじゃ行くぜ！」

かけ声と共にアイチの手を握ったナツたちの下から白い魔方陣が、浮かぶとナツの体から火をが、吹き出しその火は握っているアイチの手に伝うと数秒アイチの体を火が、包むと直ぐに消え魔方陣も消えていた。

「ナツさん大丈夫ですか？」

「おう！俺はこの通りピンピンしてるぜ！」

不安そうな顔で近寄ったウインディーにナツは、何ともないと笑うとほっとしアイチはそんなナツにお礼を言う為に二人に近寄った。

「ナツさん、本当にありがとうございました！おかげで魔法も使える様になりました」

「いいつてそんなこと！」

「ナツ！早くオイラたちのギルドに戻る？」

「そうね、ウインディー。帰りましょ」

「うん！行くっ」

二匹の猫の言葉にウインディーは、頷くとナツとアイチ、カイにレ  
ンを引き連れ五人と二匹はフェアリーテイルに向かった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9036x/>

---

光の先導者

2011年11月21日20時57分発行